

社会教育施設の教育リソース Web 化に関する事例研究

— 山梨県立考古博物館の Web ページ作成を例に —

A Case Study of Publishing Web Pages as Educational Resources in
Yamanashi Prefectural Museum of Archaeology

谷 戸 高 志 YATO, Takashi (山梨県立韮崎高等学校)	今 福 利 恵 IMAFUKU, Rikei (山梨県立考古博物館)	村 石 眞 澄 MURAIISHI, Masumi (山梨県埋蔵文化財センター)	米 山 眞 YONEYAMA, Makoto
柳 博 美 YANAGI, Hiromi (北海道大学大学院環境科学研究科学生)	山 倉 真理子 YAMAKURA, Mariko (教育学部学生)	山 本 陽 平 YAMAMOTO, Yohei (工学部機械システム工学科学生)	成 田 雅 博 NARITA, Masahiro (教育実践研究指導センター)

概要: 山梨県立考古博物館の Web ページ作成の事例は、社会教育施設所蔵の教育リソースを、学芸員、学校の教師、大学の教育実践研究指導センター及び、学生の協力によって実現するひとつのモデルを提示している。本稿では、Web ページ公開作業の過程を記述し、この試みの成功の要因を考察した。さらに、現状の Web ページの問題を指摘した上で、改善の方向について論じた。

キーワード: 社会教育施設 博物館 教育素材 インターネット WWW ホームページ

I 社会教育施設所蔵教育素材 Web 化の現状と山梨県立考古博物館の事例

教育へのインターネット活用の意義としては、学習者が本物の文化的実践に直接ふれられることがあげられる (Lave & Wenger: 1991)。電子メールやメーリングリストを使って専門家と意見交換したり、Web ページ (WWW ページ、ホームページ) などに公開されている生きたリアルタイムの情報に触れることが、学習者の意欲、関心を高めることが指摘されている。

このような利点をもつインターネットの教育への活用は、文部省委託・委嘱研究報告書等にあげられるように、一部の研究指定校や大学の附属学校の実践という段階から、すでに千のオーダーの学校における実践の段階にきている (文部省: 1997a, 1997b)。また、2003 年度までには、我が国のすべての公立小・中・高等学校及び特殊教育諸学校等をインターネット接続する政策が動き出そうとしている。

このような背景のもと、各学校のコンピュータ及びネットワークの整備、教員研修、カリキュラムの整備、ネットワーク利用にともなうトラブルの対策、インターネット上の教育素材の充実等の課題が指摘されている。本稿の目的は、インターネット上の教育素材の充実の一環として、社会教育施設の素材をネットワーク上でアクセス可能な形に整備して活動の事例を記述することである。

社会教育施設所蔵の教育素材の Web 化の現状は、文部省 (1997b) によると以下のとおりである。博物館、美術館、水族館、植物園、資料館など (財) 日本博物館協会発行の「全国博物館園職員録」に掲載されている国立及び県立のすべてである 412 の施設に対して平成 8 年 1

1月に郵送により調査を行い、253施設(回収率61%)から回答を得ている。その集計結果によると、施設の情報をネットワークで公開している現状について、40施設(22%)が公開しており、そのうち26施設(10%)がWebブラウザからアクセス可能である。また、今後の情報発信については、インターネットで自施設の教育素材データを学校等に提供することが必要だと回答した施設が168(66%)である。また、教育素材をインターネットで発信することを阻害する要因として第一位にあげられたものとして、「予算が足りない」が102施設(40%)、「要員が足りない」が54施設(21%)、「著作権がクリアされていない」が16施設(6%)であった。この調査からうかびあがってくることは、社会教育施設の教育素材をインターネット上に提供する意図はあるが、予算と人不足のためなかなか思うにまかせない、という実態である。予算については、サーバ購入やインターネットへのアクセスの費用はこれから費用が低くなり予算もつきやすくなると考えられるが、人に関わる問題はこれからも大きな問題である。

本稿では、現職の高等学校教諭が中心になり、社会教育施設の学芸員、大学の教育実践研究指導センター、そして、学生が協力して社会教育施設の教育素材をインターネット上に公開した山梨県立考古博物館の教育素材Web化の過程を記述し、このような協力による活動の評価を行う。

II 山梨県立考古博物館のWebページ作成及び更新

1 学校教育とインターネットのかかわり

ここ1年ほどで、インターネットは学校教育の中に着実に浸透しつつある。現在筆者の一人である谷戸が勤務している山梨県立韮崎高校でも、インターネットに接続されたパソコンは1台しかないにもかかわらず、国語・英語・社会・理科等の教師が授業の中でWebページを生徒に見せようとしたり、また教科に関する情報を得るために活用している。進路指導係では大学・専門学校の情報収集や可否の結果確認に、国際交流においては留学先との連絡に電子メールが不可欠なものになっている。今や学校は好むと好まざるとにかかわらず、情報化社会に足を踏み入れているのである。そのような現状の中で、大学が地域の教育機関のインターネット利用を支援することは、教育機関にとって大きなメリットがある。

2 博物館Webページ作成までの経緯

山梨県立考古博物館(以下、博物館と略す)のWebページ(ホームページ)開設の経緯を以下に概略する。谷戸は、平成7年4月から1年間、所属校(当時は山梨園芸高校に勤務)に籍を置いたまま山梨大学の平成7年度内地留学生として社会科の研修を行った。世界史(ドイツ中世史、指導教官は教育学部高橋理教授)の教科指導研究と平行して、インターネットの社会科教育への利用についても研修した。そのためにインターネット環境が十分整備されている教育実践研究指導センター(以下、センターと略す)を利用し、筆者の一人である成田と共同でインターネットの社会科教育に関わる活動を行った(谷戸:1996)。

教育実践研究指導センターの共同研究プロジェクトのひとつである「教育へのインターネット活用に関する研究」の共同研究者として、教育実践研究指導センターのサーバに電子メールのアカウントも得て、4月当初からマルチメディア教材作成室(以下、MMと略す)のMacintoshを利用した。9月には <http://peach.kjb.yamanashi.ac.jp/proj4/yato/home/index.html> というURLで谷戸のWebページの開設を果たすことができた。

谷戸のWebページには、内容として次の項目が考えられていた。

- ・所属校(園芸高校)紹介
- ・社会科教育のメーリングリスト募集
- ・高校生向けの世界史質問コーナー
- ・世界史の一教材としての特別展「黄金の都・シカン発掘展」(以下、シカン展と略す) 紹介
- ・社会科教育に有用なURL集

この中で最も内容の充実したページが「シカン展」であった。シカン展のWebページ作成にあたって博物館と最初に接触したのは11月16日であった。シカン展の紹介をWebページに載せる許可を電話で打診したところ、逆に大塚初重館長から博物館のWebページ(ホームページ)を作ってほしい、と依頼された。このようにして、シカン展のページ作成とともに博物館のWebページの作成が開始された。

3 考古博物館のWebページ公開成功の理由

博物館のWebページ公開にまでこぎつけられたのは、いくつかの好条件がそろっていたからであるが、第1の理由は、博物館館長の館長の大塚館長の理解があったことである。この点が非常に重要である。館長はすでにインターネットの有用性を確信し、当時は実現しなかったが他団体に既にWebページ作成を依頼していた。インターネットで情報を発信したいという博物館側の願いと支援の用意のあった大学側の企図が一致したのである。今後、同様のケースの場合、管理職の理解が鍵を握っていると言える。

第2の理由として、インターネットに理解があり、パソコンについての知識と技術を持った博物館学芸員の存在(学芸課長の末木氏、筆者の一人である今福等)があげられる。博物館にはすでに多数のMacintoshが配備されており、また著作権に関しては、博物館側が対応できる体制になっていた。博物館に著作権が帰属するものは全てWeb化する事を許可され、またシカン展については、学芸員が、直接著作権者のTBSの担当プロデューサーから許諾をえた。

第3の理由として、考古学に興味がありWebページ作成やコンピュータ、ネットワーク等に関するスキルのある人材の存在があげられる。

なお、博物館と対照的だったのが山梨県立文学館である。同年12月から翌年1月にかけて、考古博物館と同様の内容で交渉をしたが、館長と職員全体の理解が得られず時期尚早という理由で公開にはいたらなかった。文学館は、著作権侵害等、文学的な財産がネット上に流れだすことによってひきおこされる可能性のある諸問題を危惧していた。公的なルートを通じた管理職への要請という点が、インターネット利用に関し重要な要素となっていくと思われる。また、当該の領域を専門とし、コンピュータネットワークの価値を理解するプロデューサー役の人材もキーになると考える。

4 考古博物館Webページ(ホームページ)の開設

博物館Webページは平成7年11月21日に初公開された。当時のURLは、<http://peach.kjb.yamanashi.ac.jp/proj4/yato/archae/index.html>である。当初作成された博物館Webページの内容は、館長あいさつ、特別展「黄金の都・シカン発掘展」、博物館の地図、簡単な利用案内、関連するWebページのリンク集である。

次いで、12月から個々のページの作成に入り、出来上がり次第順次公開した。常設展示「古代望見」は2月に完成した。その後、当時の教育学部学生、柳と山倉が、企画展「山梨の遺跡96」、春の企画展「甲府盆地の遺跡」、夏の企画展「山梨の焼き物・窯」を作成、公開した。これらのうち4月に作成した「山梨の遺跡96」は、谷戸も共同で制作したものであるが、その作成手順は以下のとおりである。まず、谷戸が博物館から印刷物等の資料を受け取り、テキストファイルと画像ファイルとを作成する。次に、それらを柳と山倉に電子メールで送り、2人がHTML化したものを、再度谷戸へ電子メールで送返し、谷戸がftpでサーバにおく。谷戸が電子メール、ftp、Web等を利用するのは、教育実践研究指導センターのMacintoshを使うこともあったが、教育実践研究指導センターのダイヤルアップPPPサーバも利用した。このように、このページの作成は、ネットワーク上で協力して行った。

平成8年10月、特別展「ネアンデルタール人の復活展」を谷戸が作成した。谷戸が担当したのは現在までのところ、この「ネアンデルタール人の復活展」が最後のものである。

特別展・企画展・常設展のページの作成の目的は、単に企画の案内だけでなく、中学生・高校生を主な対象としつつ、小学生高学年にも理解ができるような、歴史教育に利用できるものを目指している。そのために解説書の要約や掲載する図版にも気を配った。



図1 初公開当時の山梨県立考古博物館Webページ

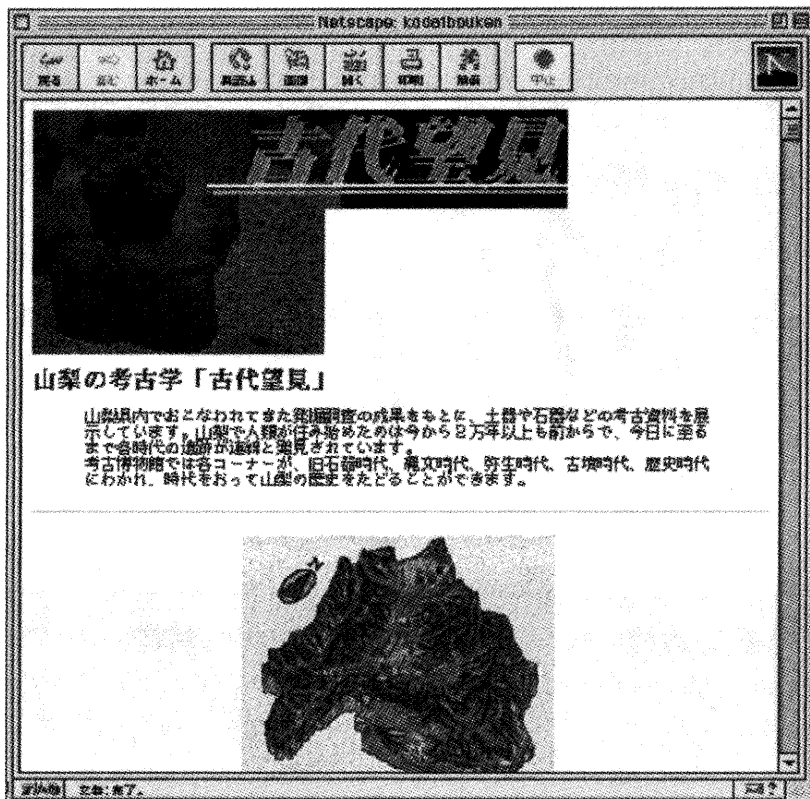


図2 常設展示
「古代望見」のページ

5 Webページに対する反響

考古博物館のページ公開に対しては、県内外から好評をいただき、励ましのメールなど多くいただき、非常に励みになった。また、国立歴史民族博物館、新潟県立歴史民俗文化館など各地の博物館からもメールをいただき、交流を持った。このような博物館同志のネット上での連携を支援していくことも、今後の可能性として重要であると考えられる。

6 Webページ作成と平行して行われた諸会合

谷戸は定期的に博物館に出向き、関係者との連絡に努めた。特に考古博物館学芸員との連携を重視し、平成7年12月11日、教育実践研究指導センターに博物館の今福学芸員を招いて、Webページを見てもらった。

その後、平成8年1月14日に、博物館で大塚館長、末木・今福両学芸員、谷戸が出席してWebページ運営に関する第1回の会合がもたれた。ついで3月12日に第2回会合が同じく博物館でもたれ、新たに柳、山倉が加わり、「インターネットWebページ作成協力員」という身分で、学芸員と協力して計画的にWebページを更新していくことになった。11月16日、博物館のWebページ作成についてのミーティングがセンターのマルチメディア教材作成室でもたれ、成田、今福、柳、谷戸が話しあった。その結果展示関係の企画は谷戸、その他は今福が中心に担当することが決定した。

博物館のWebページ作成に関わる情報交換のためのメーリングリストarchaeが平成8年4



図3 「シカン展」のページ

月25日から、教育実践研究指導センターのサーバで運用されている。

平成9年度は7月25日にミーティングが行われた。博物館のWebページは新しいディレクトリー(新URLは、<http://peach.kjb.yamanashi.ac.jp/archae/index.html>)に移され、そこで共同で作成されることとなった。これで名実ともに博物館のWebページは谷戸個人のページから独立したことになった。

この間にも、今福学芸員により、大塚館長への定期的な内容報告が行われていた。それがWebページ運営の大きな支えになっていたことは言うまでもない。

7 一時的な停滞期間

全てが順調に進んだわけではない。軌道に乗り始めたかに見えた博物館のWebページの更新に支障が起きた。平成8年11月初旬から教育実践研究指導センターのサーバであるpeachのPPPダイアルアップアクセス機能がモデムの故障をきっかけにストップしてしまっただのである。谷戸の妻が契約していたcatlineというインターネット・プロバイダーの回線を使い、インターネットに接続することはできたが、この時期はcatlineから考古博物館のWebページを公開しているpeachに対してftpが使えなかった。サーバの技術に明るくない谷戸は、peachのWebページ更新をあきらめてしまい(更新が不可能と判断)、個人でlinkclubというプロバイダーと新規契約し、linkclubの自前のディレクトリーに博物館Webページからリンクを張り、1月から「博物館の臨時のWebページ」を公開した。この頃、谷戸は校務に追われて

おり、博物館の Web ページ更新の進捗状況ははかばかしくなかった。

8 Web ページ作成までのハードル

ここで、Web ページ作成までの問題点をあげてみたい。学校の同僚達の現状を鑑みてもこれは谷戸個人だけの印象ではない。Web ページ作成は、一旦修得してしまえば難しくはないが、それまでには習熟が必要である。また習熟しても Web ページ作成には時間がかかるものである。今後もその点を踏まえて計画を立てないと、せつかくの企画も失敗してしまうであろう。

(1) インターネット接続

初心者にとっては、まずパソコンの取り扱いへの習熟が求められる。谷戸も平成 7 年 3 月までは、ワープロしか使えない初心者であった。初心者には Macintosh が修得しやすと考えられているが、それでも自分で本を読んで学びとらなくてはならないことが多い。またパソコン周辺機器には英語版ソフトも多く、使いこなすのは困難であった。

大学にいる時間は制約があるので、好きな時間にアクセスできるように、自宅からインターネットで大学のサーバに接続できるようにし、SOHO (small office home office) 環境を実現した。しかしそのための個人的な投資をせざるを得なかった。最低パソコン 1 台とモデムが必要である。内地留学期間が終了した 3 月には写真をデジタル画像として取り込むためのイメージスキャナーも加えて購入し、結局そのために 50 万円以上を投資した。個人的な経済的な負担も見逃せない点である。またインターネットの接続にはプロバイダーとの契約が必要で、使用開始までには半月以上かかるとみてよい。プロバイダー契約料や電話代等、維持費も必要である。

(2) Web ページ作成上の難しさ

Web ページ作成は、その技術の習得まで時間がかかるものである。まず Web ブラウザーや電子メールの使用に習熟することである。最後に必要なのが ftp の技術 (ファイル転送) である。以下、谷戸のケースを振り返る。

HTML の知識については、10 月に初めて講習を受けた。画像の作成と加工は、10 月から 11 月にかけて教育学部美術教室の実習授業において栗田真司助教授から指導をうけた。最初に Web ページを立ち上げたときは筆者の一人の成田が手伝い、11 月中旬以降成田の米国滞在中は、電子メールで技術相談をした。

その後、本格的に Web ページ作成に入ったが、作成時間は予想以上にかかる。平均して 1 ページに 2 時間である。最初は不慣れな面もあり、シカン展にかかった時間は約 20 時間以上、約 1 週間を要した。その内訳は取材約 3 時間 (往復と見学時間)、内容決定 (書籍を読んで要約) 約 3 時間、スキャナーによる画像の取り込みと加工約 6 時間、テキスト入力約 4 時間、HTML 化約 3 時間、ftp 転送作業約 3 時間 (実質は 30 分程度の作業だが、最初は転送に手間取り、大幅に時間がかかってしまった) 程度であった。常設展「古代望見」は 2 ヶ月、100 時間はかかっている。

次に、生ずる問題として著作権がある。博物館は資料を全て利用させてもらえたとし、シカン展の著作権者の TBS も快く公開を承諾して下さった。しかし、南米シカンのその後の新しい発掘の成果の記事を発表した新聞社 (共同通信および日経新聞) に写真と記事の転載を求

めたが、断られた。新聞社にとって記事や写真は大切な財産ということでWebページにすることは教育利用が目的であっても認められなかった。

9 博物館 Web ページの持つ魅力と可能性

谷戸は、博物館Webページ作成という仕事を通して、技術の修得だけでなく、交渉の仕方、同じ目的を持つもの同志のネットワークづくり、著作権等の知識を得ることができた。

博物館Webページは社会教育、生涯教育のための教材としての可能性、博物館相互の連携の可能性、地域社会へのアピールの可能性等を有している。最初に述べたように、今や学校や社会教育機関は情報化社会に足を踏み入れているのであるが、大学が中心となって地域の学校や社会教育施設などの教育機関のインターネット利用を支援することは、支援される側である教育機関にとってメリットがあるばかりではなく、大学側にとっても、教官・学生・院生・研修生(=現職教員)などが支援活動の中で、貴重な体験と先端技術を習得できるという点で有益なことである。このような関係、大学と地域教育機関との新しい連携が生まれてくる可能性があると思われる。

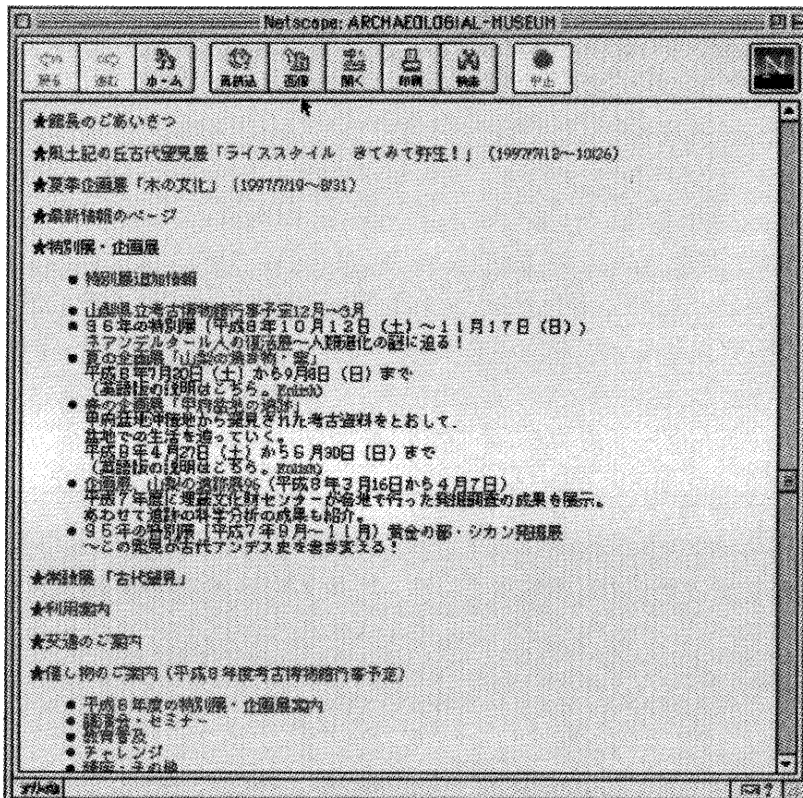


図4 平成8年12月現在の考古博物館 Web ページ (メインメニュー)

III 考古博物館 Web ページ構成の現状と改訂の方向

1 現在の Web ページの問題点

現状の考古博物館 Web ページはメインメニューにおいて項目が多く、使いにくいものとなっている。特に、新設した公開時から時間の経過とともに変更あるいは追加されるべき項目もこのメインメニューにあるため、更新しにくい構成となっている点も 否めない。全体のメインメニューの構成では現状で項目が19項目あり、大きく分けると、あいさつ1、新情報1、特別展4、常設展案内1、利用案内3、催し物案内7、関連リンク集1、メール1となっている。この中で博物館の事業の開催によって更新・追加されるべきものは特別展と催し物案内である。考古博物館において特別展は季節により年間4回の開催があり、それぞれの特別展ごとに項目としてある。これに追加するためにはメインメニューの項目を増やしていく必要があり、さらにメインメニューが大きく長くなっていくことになる。また催し物案内については次年度に計画されている一覧表と講演会、講座、教育普及事業、子供向け事業、過去に行われた事業の紹介等にわかれている。これも年度単位での全面的な更新をおこなうか、追加していく必要があり、メインメニューの増大化をまねくこととなる。

博物館が持つさまざまな情報を体系付け、わかりやすく分類し、閲覧者が希望する情報に簡単にたどりつけるように組み直す必要がある。博物館の事業は多岐にわたるのでわかりやすく、また時間経過によって、多くの情報を改訂・追加できる状況を十分に考慮しなければならない。現状のメインメニューをあらためることは緊急の課題である。公開当初からあるいは数カ月も同じままになっている状況は避けなければならない。

2 改定案

現在の考古学博物館 Web ページメニュー構成案は図5のとおりである。考古博物館の行っている事業を大きく体系付け、これをメインメニューに置き、さらに細分項目をサブメニューにすることによって、知りたい情報へのアクセスが簡易になると考える。メインメニューには館長のあいさつ、新情報、特別展、常設展、催し物案内、発掘情報、利用案内、関連 Web ページリンク集、メール、の9項目と半減する予定である。

特別展についてはサブメニューに過去の特別展一覧をおくようにして、ここから見たい特別展を選べるようにする。常設展示については展示室案内と博物館がある風土記の丘公園内の遺跡紹介をサブメニューにおく。常設展示部分については、現状のとおりで差し支えないと思われるが、展示の変更や新収蔵資料の追加にあたって容易に変更できることが望ましい。公園内の遺跡案内は、メインメニューから直接リンクするようにしてもよい。催し物案内もメインメニューに一項目としておき、このサブメニューに講演会、講座、体験学習などをおく。催し物は教育普及活動の一環であり、対象を一般と小・中・高校生向けとに分けることが一般的なのでサブメニューに対象を分けることも一案である。また、過去に行われた催し物についても、これから行われる事業の内容を知ったり、あるいは参加できなかった人が追体験したりする意味でも置いておきたい項目である。新情報はこれ以外の部分であらたに変更・追加した部分の紹介という意味もあり、関連する Web ページ内にリンクするように設定すると親切であろう。

IV 考古教材研究会の活動の一環としてのWeb化

山梨県埋蔵文化財センターでは、月末の午後、いくつかのグループに分かれて研修を行っているが、その中の1つに「考古教材研究会(以下教材研と略)」がある。この教材研ではセンターに所属する教員文化財主事が中心となって「考古資料の有効活用及び資料化」を目的として活動してきたが、ここではその紹介とともに「教材化」という視点から今回のWebページ作成について述べる。教材研は、先にふれたように山梨県埋蔵文化財センターが発掘した考古資料の教育普及という観点から1991年に発足し、翌年から教員及び児童・生徒向けとして「先生のための考古資料集」を第5集まで発行してきた。その間1996年に県内各校の教員に対して実施したアンケートの結果、考古資料の教材化について以下の3点が主にのぞまれていることがわかった。

- ・地域性(山梨県に関する遺跡の情報を教えてほしい)
- ・速報性(現在の発掘情報を教えてほしい)
- ・ビジュアル性(写真,特にカラーのもを多くしてほしい)

これらは、平成元年に改訂された文部省の学習指導要領にも明記されている。以下はその一部である。

- ・身近な地域や国土に残っている遺跡や文化財などを調べて、自分たちの生活の歴史的背景に関心をもつとともに、わが国の歴史を学ぶ意味について考えること。[小学校 第6学年・内容(1)ア]

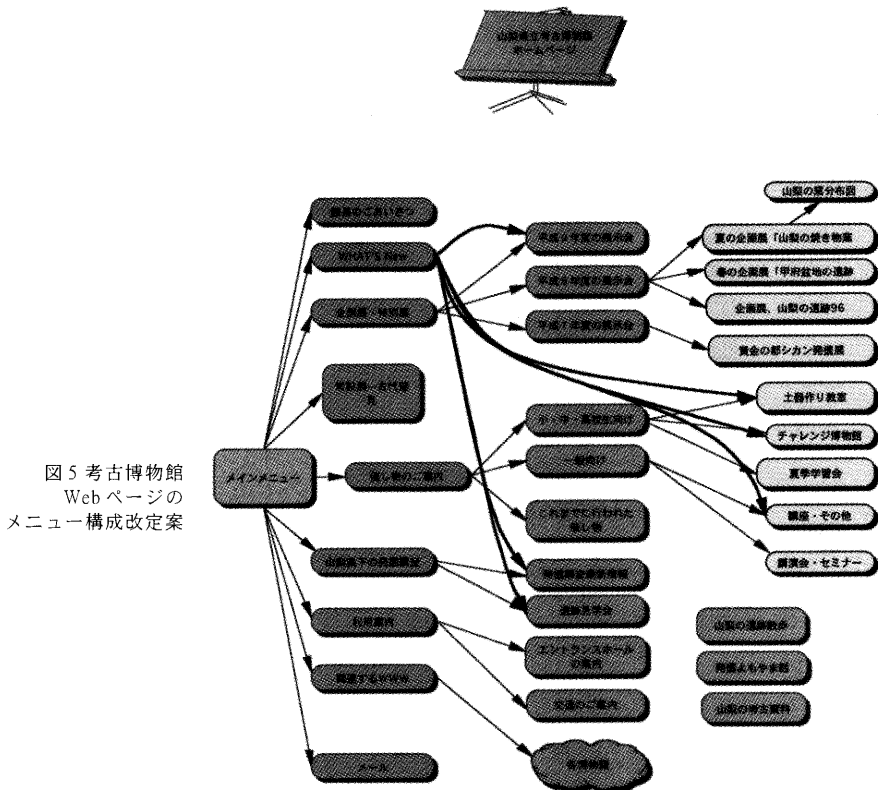


図5 考古博物館 Web ページのメニュー構成改定案

・内容の(1)及び(2)については、考古学などの成果を活用して生活の有り様のあらましを理解させるとともに、神話、伝承などの学習を通して当時の人々の信仰やものの見方などに着目させるよう留意する。(以下略)[中学校歴史的分野・内容の取り扱い(2)]

・地域の史跡や諸資料の調査・見学などを取り入れるとともに、遺物、伝承などの文化遺産を取り上げ、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てるようにすること。[高等学校日本史 B・同(3)ウ]

また、小学校においては次のような記述も見られる。

・指導計画の作成に当たっては、博物館や郷土資料館の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行い、それに基づく表現活動が行われるよう配慮する必要がある。[指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い] これらから、今まで以上に遺跡や遺物、更に考古学・民俗学が授業の中で果たす役割はより重要なものになってきている。

そこで、教材研では新しい試みとして1996年度、それらの点を重視した「先生のための遺跡だより」を4号まで発行した。しかし、多くの問題点があったのも事実である。まず、教材研の出版は基本的に自主的なものであり、予算が限られている。印刷はパソコンのプリンターを使用したが、インク代などが高額になり、定期的に発行することができなかった。次に時間的な問題がある。県内の学校・教育機関は約400あり、各号の印刷が終了するまでに数週間が必要となった。また、印刷時期は筆者らの時間に余裕のある発掘作業終了後の1～3月に限定されてしまった。更に、前述の予算的、時間的なことを考えた場合写真のサイズをあまり大きくできず、当初の目的を十分満たせなかった。

以上のような理由により「～遺跡だより」が必ずしも最良の方法ではないことがわかった。この問題点の解決策としてインターネットが有効であると考えられるのである。以下、そのメリットについて述べてみる。まず、ビジュアル面についてである。写真などに関しては「～遺跡だより」と同様カラーのもの、加えてより大きなサイズのもので使用可能であること(無制限というわけにはいかないが)を考えれば、より本物に近い情報を提供することができる。生徒にとっては実物を見るインパクトに勝るものはなく、その点では資料として有効である。また、身近な歴史を知る手がかりという点でも同様である。次に速報性である。ページの作成さえ終了すればすぐに画面上で情報を得ることが可能であり、予算的な面でも発行部数が制限されることがないため、いつでも好きな時に、自由に見たり資料として利用することができるのである。

ここまでインターネットを学校で利用する教材としての利点について述べてきたが、この方法にも問題がないわけではない。その1つは更新の時期である。先にふれたように、「～遺跡だより」の速報性が活用できなかった最大の理由は、作成・印刷が発掘のある時期にできなかったことだった。今後Webページ作成の段階でも同じ問題がでてくる可能性は否定できない。いかにして定期的(しかも短い周期で)に新しい情報を更新していくかが現実的な課題となってくるだろう。

2つ目は利用の形態である。現在、県内の各学校の現状を考えた場合、生徒用のパソコンに電話回線が接続されているところは(特に小中学校では)あまり多くない。当面は教師が必要に応じてプリントアウトするか、あるいはコンピュータ画面を液晶プロジェクターで投影するなどの方法をとるのであろうが、これでは生徒にとって受け身の学習になってし

まう。コンピュータを利用するメリットは十分発揮できないし、学習指導要領の総則にある「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」「個性を生かす教育の充実」といった方針にも対応できていないといえない。また、この方式で画像データ等を印刷物として使用した場合には当然著作権の問題も生じてくる。

以上あくまでも「教材」としてみた場合、インターネット利用において予想されるメリットとデメリットをあげた。この試みはまだ始まったばかりであり、学校にとっても次第に重要なメリットとなっていくだろうが、そのようになるためには情報を提供する側と利用する側双方の努力と共に、今後進んでいく学校側での受け入れ体制(通信 回線)の整備も必要である。

V 今後の展望と課題

考古博物館では、Webページ本来の目的として、考古博物館の展示、遺跡などの情報を紹介するという以外に、学校など教育機関に考古資料を教材として提供するというを考えており、このような点をねらったWebページを作っていく予定である。

1 考古博物館の収蔵資料

考古博物館における収蔵資料というのは、遺跡の発掘によって出土したものだけではなく、遺跡での住居跡や古墳の全体像、発掘中の現地での写真、遺跡全体を測量した図面や住居跡などの配置図、遺跡の位置なども重要な資料である。そのほとんどは発掘調査後に報告書という形でまとめられているが、ほとんどが記録目的のためであり、専門知識がないと活用しにくい。考古博物館の基本的な機能と関連するが、考古資料を一般に理解できるかたちで展示・公開していくかは、博物館の基本構想として設定され、細かな点では所属学芸員の運営方針によって決定されていく。山梨県立考古博物館では考古学そのものを展示紹介していくというよりは、考古資料を通して山梨県の歴史をみていくという視点が強調されている。考古資料は美術品ではなく、あくまでも歴史性になったものである。美術的価値がまったくないわけではないが、むしろその時代の特色が明確になるものを展示の対象としているのである。

(1) 常設展示の紹介

考古博物館の場合、常設展示では県内の考古資料をとおして山梨県の歴史とその特色を紹介するようにしている。発掘調査の成果により随時展示品は入れ替えを行っているところである。現在、Webページは、当館が刊行している常設展示案内「古代望見」をもとに構成されている。そのためWebページの内容は、常設展示の概要に近く、展示内容においてそのすべてを網羅しているわけではなく、掲載している考古資料は当館の代表的なものだけである。このため常設展示の項目には今後、展示しているものを中心に多くの資料を追加していくことでより豊富な内容となり、理解しやすくなると思われる。

(2) 収蔵品データベース常設展示の紹介である程度の収蔵品データベースの機能を持たせることも可能である。しかし、膨大な資料を収蔵しているため網羅的に行うことは不可能

であり、あまり意味のないことである。考古資料は鑑賞の対象ではなく、歴史性や時代性をもつものであり、展示においても考古資料にはある時代のコンテキストの中で位置づけることによりその資料の価値が見いだされる。このためすべて網羅的に資料化していくよりもそれぞれの時代の特徴を示すものを常設展示紹介の中で追加していくことのほうが重要であると考えている。

(3) 縄文土器のデータベース 考古資料をつうじて山梨の歴史をみるとき、特に縄文土器は山梨の歴史性、時代性を現している他に、造形的も優れていることが多い。これは山梨のみならず日本を代表する縄文文化の特徴を持つものである。現在、別のプロジェクトで当館所蔵の約100点の縄文土器を3D映像としてデジタル化する計画がすすめられてもいる。将来的にはこのプロジェクトの成果をこのWebページにリンクすることも考えている。これにより、バーチャルミュージアムのようにコンピュータ上で縄文土器を回転させ上から下から裏からも見るができるようになる。

2 特別展の紹介

考古博物館における特別展は年間4回を計画している。春と夏には収蔵資料を中心に山梨県内にかかわるテーマで行っている。秋には日本国内外に関わるテーマを設定し、山梨との関わりや位置づけを考慮した特別展を行っている。冬には山梨県埋蔵文化財センターの発掘成果を速報したものが行われる。これらの展示会では展示図録や展示案内パンフレットを作成しているのので、これをもとにWebページを作成することができる。ただ、収蔵資料以外のものについては所蔵者の掲載許可が必要となるが、いままで考古博物館で対処している。

これらの展示会紹介はメインメニューの特別展項目からサブメニューに入り、ここでそれぞれの特別展タイトルを選ぶようにして、特別展紹介ページへと移行できるようにしたい。

3 普及事業の提示

普及事業はおおきく講演会・講座と体験学習にわけることができる。情報提示の形としてはこれから行われる行事予定についての広報となる。博物館で刊行している「博物館だより」にも同様の情報が掲載されているが、すでに行われてしまった行事については一般の方にとってあまり意味のある情報ではない。そこで特に体験学習では、縄文土器作りや古代料理などをおこなっているが、どのように行ったかということを経験提示することにより有効であると考えている。縄文土器作り教室では実際にどのように作っていくのかその過程を細かく図示・解説したテキストを参加者に配布しており、こういったものをWebページ上で提示することにより参加できなかった人もこれにより追体験が可能となる。

4 公園内遺跡案内図

考古博物館のある甲斐曾根丘陵・風土記の丘公園は40haの敷地内に20箇所以上の遺跡が知られており、保存整備され公開されている。実際に公園内にある古代の遺跡をみることが可能であり、ここの遺跡の出土品も博物館で展示されている。現在、Webページでこの項目はないが、追加するべきであろう。博物館内でのコンピュータ案内システムではマルチメディアにより同様の機能を持ったものがあるが、館内のみの利用である。

5 山梨県下の発掘状況

埋蔵文化財センターの持つ情報により、山梨県下の発掘調査の様子や進行状況、成果などを知ることができ、最新の考古学情報として非常に有効である。

考古博物館のWebページ作成、更新にあたっての今後の課題であるが、じっさいのWebページ化を行っていく人材の確保の問題が非常に大きい。この人材の確保については、たとえば成田(1998)のように、教職専門の大学における科目の活動の一環として、教育ボランティアとして考古博物館のWebページ作成支援を行うという試みがある。社会教育施設にとっては、インターネット上に教育素材を発信することができ、学生にとっては社会教育施設における教育活動に参加しながら、その実態を身近に見ることができるという教育効果がある。

このような試みを円滑にすすめるためには、教育ボランティアと、社会教育施設との間のコーディネートを行う考古学、歴史学あるいは社会科教育関係の大学教官や大学院生の参加が期待される。

参考文献

Lave, J. & Wenger, E.(1991). *Situated Learning : Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press. Cambridge, 邦訳 佐伯胖(1993).状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加. 産業図書

文部省(1997a). 学習用ソフトウェアの改善開発等研究依託実績報告書(情報通信ネットワーク(インターネット)の教育利用に関する調査研究) 学校教育における情報通信ネットワークの活用方法の研究. 社団法人日本教育工学振興会

文部省(1997b). マルチメディア型の文教関係情報化推進事例の開発研究実績報告書 インターネット利用のための教育素材データベースの現状と課題. 社団法人日本教育工学振興会

成田雅博(1998). 教職専門科目の一環としてのコンピュータ・ネットワークを利用した教育ボランティア活動. 平成9年度大学教育改革報告書.

谷戸高志(1996). 平成7年度留学生内地留学報告書. 山梨県総合教育センター